木村文助研究 No.1

通　　信　　2000、6、20

「村の子供」のコピーから始まった

木下　寿実夫

木村文助の顔は、私の母校である大野小学校に校長の写真が掲げられていて微かな記憶があった。木村と綴り方指導、「赤い鳥」についてはずっと知らずにいた。

文保研活動に関わってから、確か会員の方からと思うが「村の子供」の事を知った。早速誰が持っているか調べ、本町の赤井千代さんの手にあることをつき止め、無理にお願いし「一週間で返す」ことを約束し借用した。

ぎっしり詰まった綴り方、木村の序文、読み切るのは後にして取り敢えず函館でコピーした。表紙が無いので困ったが、北海道教育史に「村の子供」の表紙が小さく載っていた。それを当時の社会教育課長坂爪さんに模写してもらった。それ以来資料収集は遅々としたものであった。

木村について北海道教育史の各巻に載り評価が高い。手元にある数少ない研究者の資料を見ても評価には頷ける。さて地元はどうかというと、大野町史の学校教育には記述が無く大正時代の青年活動の欄に載ってはいる。大野小の同窓会を核として地域づくりに当たったことで、一方の柱が抜けている。

消えようとしているものに早く光を当て再評価しなければ、またそれまでの挽回の意味も込め丁度１９９７年が「村の子供」発刊７０年であり、本格的に活動を再開し講演会、資料展、「赤い鳥」復刻版購入と昨年まで続けてきたところであり、会報「ぶんぽけん」、町政要覧、広報、あるいは新聞等で情報化されていて詳細は省く。

今回秋田から「北海道の児童綴り方名作選」が届き、本来大野で作るべきもので、恐縮すると共に感謝である。京都から「北海道教育史の研究ー木村文助の場合ー」が届き、一層活動に弾みが付こうというもの。

仏教大学岡屋先生は１０数年前大野に入り調査したという。もう一度入りたいと。

情報収集が進み、ネットワークづくりに結び付けたい展望もある。

木村文助に関心のある方の情報交換の場としてこの通信「木村文助研究」が活用されれば幸いである。

「赤い鳥」に載った大野の綴り方は「北海道の児童綴り方名作選」に入っているので紹介する。

［題名］	［高は高等科　尋は尋常科］		［「赤い鳥」掲載号年月］	
１９２２年				
櫨（賞）	高１	新栄　とよ	大正１１年	８月号
兄の病氣	２	釣谷　くに		９
右の手	２	川口　良子		１０
１９２３年				
母の死	１	為国　はる	１２	１
酒のみ	１	村本　金彌		４
妹の靴	１	寺田　ちよ		６
柿盗人（賞）	２	中村　とく		１１
１９２４年				
夜　廻（賞）	１	金川　つわ	１３	１
母（賞）	１	大村　いち		１
稲　刈	２	田島　たき		２
栗盗人（賞）	１	西谷きくゑ		３
父ちや	２	安保　さき		５
身代りの金（賞）	２	田島　たき		６
寺まゐり（賞）	尋２	木村　れつ		７
錢（賞）	高２	西谷きくゑ		７
おひる（賞）	尋２	田山　みつ		８
燒場の爺さん（賞）	高２	金川　つわ		９
＊以後賞を推奨と佳作に分けている				
せ　み（推奨）	尋２	中谷　富彦		１０
醉つばらひ（推奨）	高２	若松　きよ		１１
母	１	高田　むめ		１２
１９２５年				
支那人（推奨）	尋３	田山　みつ	１４	１
父（推奨）	高２	若松　きよ		３
○第二次入選記念写真載る				４
母のかへり	１	小林　れん		５
乞　食（佳作）	１	吉田　みつ		５
◇名作選では題名変更				
歸つた兄の話（推奨）	２	若松　きよ		７
しかられて	尋４	田山　みつ		８
さけのみ（佳作）	４	小笠原みち		９
まる一のお母さん（推奨）	高２	松原　とよ		１０
１９２６年				
食ぱん	尋６	金川　重雄	１５	１
＊「村の子供」の巻頭に載ったので「北海道教育史」に紹介される				
父の足（佳作）	高２	高田　むめ		１
兄（佳作）	１	中村よしえ		２
馬鹿はつ子（推奨）	尋５	吉田　孫七		３
豚の子	高１	影井　愛		３
どら猫（推奨）	２	松原　とよ		４
死　人（推奨）	尋５	吉田　孫七		５
私のおもひ（推奨）	高２	斎藤　きえ		７
◇名作選に赤い鳥選評と文中の歌「浜千鳥」が載る				
馬車にひかれた子供（佳作）	２	影井　愛		１０

飲んだくれ（佳作）	2	影井　愛			11
ある婆さん（推奨）	尋6	吉田　孫七			12
＊オマツリー低年読物ー	教師	浪岡五十三			12
１９２７年					
犬の親	高1	松田　あつ		16	1
＊雑誌は早く発刊されるので大正になっている					
納豆賣り（推奨）	尋5	田山　みつ	昭和	2	3
祖　母（推奨）	高2	北畠　千代			4
大工さん（推奨）	2	吉村　きみ			5
豚（佳作）	1	岡村チヨノ			6
支那人の手品（推奨）	2	池田　いね			7
＊「綴方生活　村の子供」が１ページ全面広告載る					7
山の家（推奨）	尋5	釜澤　みつ			8
私の足	6	牧野　はる			9
乞　食（佳作）	高2	吉田　きそ			10
◇名作選では題名変更					
馬鹿あんこ（佳作）	尋6	田山　みつ			11
子守のりさ（推奨）	高2	富谷　千代			12
＊赤い鳥代表作集に載る					
１９２８年					
おぢいさん	尋6	斎藤百合子		3	1
火　事（佳作）	高1	新里すえ子			2
川流れ（佳作）	尋6	鈴木　君代			3
にはとり	高1	高田　ミセ			6
電　話	2	濱田　サキ			7
裏の婆っちや（佳作）	1	丸山喜一郎			9
栗ひろひ（佳作）	2	池田　金圓			10
１９２９年					
子　馬（佳作）	尋6	富谷ルリ子		4	1
蟹	高1	牧野　はる			3
１９３６年					
＊私への影響　戸井日新小校長		木村　文助		11	10（最終号）

以上綴り方５９編は木村文助が編した「村の子供」や「村落児童文選」にほとんど掲載されている。

◇名作選には現代仮名遣いに直している。全道１０５編中５６編が載る。

・・・・・・・・・・・

「赤い鳥」（鈴木三重吉主宰）

創刊　１９１８年・大正７年７月号
　　１９２３年・大正１２年１０月号、１２月号は関東大震災で休刊
　　１９２９年・昭和４年３月号を発行して休刊
　　１９３１年・昭和６年１月号より復刊

終刊　１９３６年・昭和１１年１０月号（鈴木三重吉追悼号）

綴り方は鈴木自らが全国から集まった毎月数百～約二千点の中から十点ほど選び批評を丁寧に書いた。自由画は山本鼎が選び批評を書いた。

自由画には３５点が入選した。

大野町郷土資料室には「赤い鳥」復刻版１９５冊と解説書、関連の図書、木村文助の資料も若干あり閲覧できる。

『村の子供』に載った作（「赤い鳥」に載ったのは除く）

（著者木村文助　文園社　昭和２年４月　定価７０銭）

田圃	高	2	富谷　千代	弟	高	2	清水　きみ
魂		2	村本　スエ	算術から		2	清水　きみ
手紙出しに		2	女	晝火事		1	金川　つわ
私の病気		2	斎藤　キエ	青物賣		1	金川　つわ
哀れな兄弟		2	女	鼠		2	安保　さき
手品遣		1	斎藤　京	雇人		1	横畠　千代
病送り		2	坂本　シナ	「たきゐ」		2	斎藤マツノ
千重子さん	尋	6	谷口三重子	埃燒		1	川口　よし
さき子の父	高	2	村本　スエ	盲目の姉		2	田山　きさ
化物の話		1	樋口　タツ	涙		2	女
五圓札		1	女	魂消た婆さん	尋	4	千葉　祐恭
百日咳		1	野田　リエ	魂消た婆さん		6	吉田　孫七
雪落し		1	池田　わか	救		6	吉田　孫七
花田の弟		1	小林　れん	川流れ		2	伏見　たみ
隣のお父さん		1	村本　スエ	おどり		3	山崎トシエ
宿った乞食		1	村本　スエ	「婆ちや」		3	小笠原ミツ
冬の夜		1	松原　かつ	すゞめ		3	釜澤　みつ
酒賣		1	松原　トヨ	日曜日		5	松田　あつ
唖の爺さん		2	松田　アイ	タマシ		1	小杉　門三
だいしとり		2	石島タキエ	へび		2	牧野　はる
砂糖		2	西谷キクエ	あづきであろ		2	田山　みつ
此間の手紙		2	若松　きよ	「かね」		5	牧野　とせ
餅搗		1	女	半鐘		1	千葉　昌之
犬の子		2	金丸　せい				

＊

『村落児童文選』に載った作（「赤い鳥」に載ったのは除く）

（著者木村文助　文園社　昭和５年４月　定価３５銭）

へら	尋	1	西川　惣一	夢	高	2	富谷　千代
うちのこども		1	利谷　悦子	遠足の朝		2	野田　リエ
まさのりさん		2	加藤　重矩	かくれんぼ		2	池田　いね
子ねこ		2	富谷　清志	トランプ		2	中野　武義
しんだばばちやん		2	村本　ソノ	狂氣		2	豊岡　せい
マント		2	斎藤　リエ	大沼行		2	岡本チヨノ
祖父		5	中村　かん	友さん		2	富谷　テフ
津波		6	吉田　孫七	父の足		2	米内　正二
八と嫁	高	1	吉村　キミ	米借り		2	新里すゑ子
鐵管		1	女	神の救		2	丸山喜一郎
盗人の正體		1	松田　あつ	運命		2	池田　金圓
弟の怪我		1	松田　あつ	兄の思出		2	島田マツエ
茂吉		1	立花トモエ	下駄		2	斎藤　まつ
火の玉		1	金川　つわ	茅くばり		2	成田　キミ
時計		2	蛯澤　チサ				

＊

仏教大学岡屋昭雄先生が昨年広島大学教育学部国語教育学会で発表した資料をいただき若干紹介する。

「北海道国語教育史の研究ー木村文助ーの場合」

はじめに

「焼き場の爺さん」や「母」が「赤い鳥」前期の綴り方を代表する動向を作り出す力になったと引用。

1、木村文助の綴り方作品の特質

「焼き場…」と「母」の全文と（鈴木三重吉）と（木村文助）の批評もそれぞれ載っていて考えの違いが存在している。

2、「赤い鳥」綴り方との決別

木村の論文では文学者鈴木三重吉と教育者との立場の違いは自然的な相違として指摘している。

3、文助の綴方の本質を求めて

木村文助が突如砂原小学校転動になった経緯が詳細に載った新聞記事。また教えを受けた赤井千代さんの証言も紹介している。

おわりに

今回は木村文助の綴方の本質について論究し今後も解明したいと結んでいる。

参考文献

滑川道夫『日本作文綴方教育史３昭和編』（国土社　１９８３年）
木村文助『綴方生活　村の子供』（文園社　１９２７年）
「綴方生活１２月号〈第７巻第１０号〉」（文園社　昭和１２年）
中内敏夫『生活綴方』（国土社　１９８２年）

（別資料）「木村文助の綴り方教育について」

木村著書２冊『綴方生活　村の子供』、『村の綴方』の発刊に寄せて鈴木の序文が載っている。

『赤い鳥』創刊の意図、大野校の方言と標準語との関連、綴り方を伸ばすには教師の力と述べている。

北海道新聞　2000年（平成12年）6月14日（水曜日）

方言豊かな文集 末永く残したい

無職　木下寿実夫（渡島管内大野町・63歳）

先日、秋田県の方から「北海道の児童綴（つづ）り方名作選」が届けられた。

大正から昭和初期にかけ、東京で発行された児童文芸月刊雑誌「赤い鳥」には、入選した全国の子供たちの綴り方が載り、日本中から注目された。

名作選には道内からの「赤い鳥」入選作百五編が載っていて、そのうち五十六編が私の母校である大野尋常高等小学校のものだ。表現が豊かで方言が多く、当時の生活文化がにじみ出ている文ばかり。まとめた方へ感謝し、うれしい限りである。

「二十一世紀へ残したい方言は」と、最近はよく言われるが、当時の学校では一般的に標準語で書くことを求め、方言を卑しんでいたようだ。「赤い鳥」主宰の鈴木三重吉は、方言を入れてもよいとし、素直に書かれた文を入選させた。これに共鳴した木村文助校長は、教師と共に子供たちに綴り方を指導し次々入選させた。

二十一世紀へとつなげる方言の入った綴り方がよみがえり、郷土にいつまでも残したい貴重な一冊を頂いた思いがする。

◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇

〈新聞掲載〉

- 「北海道の児童綴り方名作選」…函新
- 「北海道の児童綴り方名作選」…道新投稿

◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇

〈届いた資料・図書〉

○東京よりＦＡＸ；広島大学国語学会で「木村文助」研究が発表されたとの情報。

○資料；北海道国語教育史の研究ー木村文助の場合ー　京都仏教大学岡屋氏
（６ページと３ページ）

○図書；「北海道の児童綴り方名作選」２２４ページ　１０００円
著者　久米道彦

◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇

〈礼状・資料送付〉

○広島大学図書館、仏教大学岡屋氏、秋田県久米氏

発　行　０４１－１２０１　北海道亀田郡大野町本町６８　木下　寿実夫

町文化財保護研究会会員　町文化財保護審議会委員　道文化財保護協会会員